

そこで私が現在、一番力を入れてやっている仕事は、最近の中国本土や台湾で行われている地理学研究成果を、日本の学界に知らせようとのことです。なかなか優れた研究成果をあげている方面もありますし、客観的材料が不足なのに、結論の方を先行させている論もあります。しかしどれも一生懸命ですし、取組んでいる問題のスケールも大きなものです。それにつけても感ずることは、中国文が読める地理学者が、もっと日本に出ないかということです。そういう自分自身の中国語の能力もあやしいものです。しかし向うへは日本の研究物は行きます。反対に向うからは、研究物がなかなか来ませんが、その上にわれわれが新聞などで報道される方面にだけ関心を持ち、この国の学問に無関心でいたのでは、ますます一方交通になるばかりです。これは日本の地理学の発達にもよくないことと思います。

軽井沢雑感

有末武夫

このような題で何か書いてみようという気になったのは、私が“国際的高級別荘地”の住人になったからでもなく、なるうと欲しているからでもない。観光学会の見学旅行でバスにゆられながら見たり聞いたり感じたりしたことを書いてみることにしたい。

第1に現在の軽井沢は国際的でもなく、高級でもなく、別荘地でもないということである。旧軽井沢が開かれたのは明治後期日本在住のイギリス人が相談して、200戸の別荘を建てたことによるもので、大正年間までは外人と交際する必要のある日本人別荘をも交えて、たしかに国際的であった。今はルームクーラの普及と飛行機の発達により、日本国内に外人の避暑のための別荘が不要になったという。戦後の世相の変化は、ショートパンツの奥様に表通りを歩させ、真夏でも白足袋を必ず着用していた国際的高級別荘の奥様をなげかせている。また近年は会社の寮や、各種団体の宿泊施設がやたらとふえて、1~2泊程度の団体旅行者が、別荘地の雰囲気をごわしている。小中学生の団体が土産物店にむらがっているようすは、日光や箱根と同じで“日本の大衆観光地”と看板を塗りかえたらいかなものか。

第2に、上述のようにいわれても、私のような下下の者が旧軽井沢の植込みの奥にちらつく古い建物を見ると、やはり別世界といった感じをうけることは事実である。このようなたたずまいの中に、皇太子殿下と美智子妃殿下のロマンスの花を咲かせたテニスコートを見た。戦前の天皇や皇室のいかめしさを知る者にとって、そこがあまりにも開放的で小さく、しかも粗末で、あまりにも普通すぎるテニスコートであることに、最初はとまどい、次に少しがっかりし、最後にこれでよいのだと自分自身にいいかせながら、カメラを構えてみた。そしてそのような年配の一群をにやにや

笑いながら横眼で見ている若い人々を意識したとき、はっきり世代の移り変わりを感じざるを得なかった。

第3に、中軽井沢を中心とする西武系の観光開発のすさまじさを肌と感じ、躍進する日本経済の底力をここに見出したのである。西千が滝の分譲別荘地では、300坪以下には細分せず、坪3~5万円、早い者勝ち、すぐ売切れますよ、宣伝はしていませんなどと高飛車に出られると、こんなところを買い奴に憤りさえ感ずる。一方、南軽井沢に「森と湖の国」として宣伝されているレイクニュータウンは、庶民的別荘地として人気を呼んでいる。ここは樹木の繁る急斜面を50~100坪程度ずつに分譲し、すべての別荘から見晴らしのよい森と湖の風景を楽しめるようにとのことである。国土開発会社では分譲後、別荘の設計・建築、その後の管理、滞在中の生活一切の面倒など未永くおつきあいさせて頂きますという。ほかに200万ないし300万程度の建売別荘も用意されているという。赤・青・白の屋根が新緑に映え、続々と建築が進められているニュータウンを一巡すると、身の程もわきまえず、こんなところに別荘をもちたいなあと思う。しかし一行の中から、もっと詳しく見たい、まだ売れてないところを案内してほしい、といてバスを降りる人が出たのを見ると、幻想はたちまちやぶられ、経済力の乏しい自分につづく情なくなってしまった。

近 況

浅 井 辰 郎

「ヨーロッパに1年も居たんだから、今年はお茶大に来て外国地誌の講師をやってくれ給え」と渡辺先生におだてられ、うかうか現われたが、講義の印象調査をしたら、地理学科の学生諸嬢からは「テンポが遅い、詳しすぎる……」、他学科の方々からは「術語などもっと時間をかけて詳しく……」とほぼ同数、正反対の意見が出て弱っている所です。それにしてもカラスライドや8ミリには皆さんから「理解を大に助けるからこれからも」と賛成が非常に多く、内心大いに喜んでいるのです。「社会や人間のことも多く……」との御希望は、もちろん学期始めに示したように予定には入ってはいますが、更に努力を重ねましょう。

少し自己紹介を。大正3年静岡市に生れ、父の住地福岡に2年、小学校以来は東京。八月子で生れてから疫病、関東震災、ソ連抑留と死に損なりこと4回。だからまだ何かやるべきことが残っているのだらうと模索中。中学の修学旅行で中仙道や北海道、京大在学中には大山山麓の地理調査、網干塩田、鳥取砂丘の微気候調査、さては木原均、今西錦司氏らと内蒙古調査2ヶ月。満州国の建国大学に勤めてからは白頭山・内南洋の旅行、北シナ五台山の高山気象観測などと割合に方々を廻りました。復員後は資源科学研究所や法政大学で、東北冷害の主因である冷風「ヤマセ」をいろいろ